## 4-2　「相・法・創」とは何か──三つの視座を一つに統合する

人が整った空間に暮らすためには、「氣」だけでは十分ではありません。

法を知らなければ、実現できない配置がありますし、設計を担えなければ、氣の流れを“かたち”にすることができません。

私は現場でその限界に何度も直面してきました。

風水師として氣を読み、

宅建士として土地や法を読み、

建築士として空間を描く。

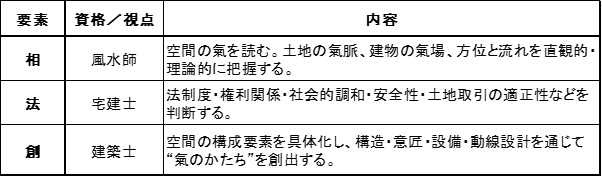
それぞれの立場には、それぞれの論理があります。

しかし、それを一人の人間の中で貫いて初めて、“思想としての空間”は立ち上がるのだと私は考えるようになりました。

私はこの三つの視座を「相・法・創」と名付けました。

これは単なる資格の寄せ集めではありません。それぞれの視座が補い合い、統合されて、ようやく一つの思想になる──

そうした“融合の設計思想”を伝えるための言葉です。



たとえば、氣の流れを読むことができても、法規制を無視すれば、それは絵に描いた餅に過ぎません。また、法と氣の整合がとれていても、それを形にできる設計力がなければ、空間は“思想未満の構造物”になってしまいます。

この三つの視点が揃っていなければ、風水は単なる“運気上げ”に矮小化され、空間設計は“図面通りの箱作り”に陥ってしまいます。

もちろん、これらすべてを一人で担うことは容易ではありません。しかし、少なくともこの三視点の重要性に気づき、互いに理解し合い、連携するプロセスを生み出さなければ、氣を扱う空間は、いつまでも「理想」と「現実」の分断に苦しむことになります。

だから私はこの「相・法・創」という概念を、“資格を統合した役職”ではなく、“空間に関わる者すべてが共有すべき思想”として提案したいと考えています。

たとえば、設計士が氣を学ぶ。

不動産業者が空間の力学を知る。

風水師が建築法規と施工の現実を理解する──

そうした“思想的越境”こそが、これからの時代に必要なのです。

これは、かつて分断されたまま積み重ねられてきた住宅や都市計画への、静かなる提案でもあります。

しかし、それは決して誰かを責めるものではありません。むしろ、そうならざるを得なかった社会の構造──

専門性の縦割り、教育の分断、設計と精神性の乖離──

そうしたものが長年かけて築き上げられてきた“仕組み”なのです。

その結果、風水住宅を願うクライアントたちは、風水師・不動産業者・建築士という断絶した関係者のあいだを右往左往し、翻弄されてきました。

誰が全体を把握し、誰が最後まで責任を持つのか──その構造は曖昧なまま、多くの人が“自分の理想と異なる家”に住むことになってしまいました。

だからこそ私は、思想としての「相・法・創」を実現したいと思っています。これは今ある制度や専門性を否定するものではありません。むしろ、それぞれの立場の尊厳を保ちながらも、互いに理解と協働が生まれるような、“横断的な橋”としての思想です。

次節では、「相・法・創」が機能しなかったケースと「相・法・創」があったから可能になった事例を紹介していきたいと思います。